

ティーチング・ポートフォリオ

永嶋久美子

(記入日：2025年8月8日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

調理学実験 (2年前期選択必修科目1単位), 給食経営管理論 (2年後期選択科目2単位), 給食管理実習 (1) (3年前期選択科目2単位), 給食管理実習 (2) (3・4年選択科目1単位), 栄養教育実習演習 (事前事後指導) (3年通年選択科目1単位), 生活文化専門演習 (3年通年必修科目4単位) など

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

私の教育理念・目標は、科学的根拠に基づいた食、栄養、健康、調理を理解し、その問題解決に向けた行動をPDCA サイクルによって主体的に取り組む力を身に付けることである。また、これらの力を身に付けた実践力のある栄養士、栄養教諭の養成を目指している。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

学習を進めるにあたり、各科目では一般的な事例をあげ科学的根拠の学習、基準、技術の習得を進めている。また、授業後の学習の振り返りのためのワークシートを作成し、授業後の課題とした。提出された課題はコメントを入れ、理解度の低い課題、質問については次の授業で解説するなどのフィードバックをした。

給食管理実習 (1) では配布資料、授業で記録するフォーマットはTeamsのファイルで共有した。授業時にはこれらのフォーマットを活用して、実習の計画から実施、振り返りまでを記録し、学生同士で情報の共有をすることにつなげた。実習においては、通常的大量調理施設衛生マニュアルに基づいた衛生管理を実施した。大量調理の実習ではTAとして4年生が実習のサポートとともに実習の記録として動画の撮影をした。これらの動画、画像を実習班で共有し、実習の振り返りに活用した。客観的な視点で実習を振り返り、次の実習にこれらの振り返りが活かされた。また、これらの動画を活用して実習をプレゼンテーションするための動画編集を行った。試食の評価等は Forms を活用し、PDCA サイクルにより実習を改善しながら実施した。

調理学実験は、各回の実験のレジュメ、レポートフォーマット、図表フォーマットを Teams で配信した。レポートは Teams の課題にて提出し、ルーブリックを活用して評価し、コメントと共に次回授業までにフィードバックした。

栄養教育実習演習 (事前事後指導) では身近な事例および給食施設の事例を例に挙げ、ワークシートを活用しながら学習を進めた。実際の現場の状況を学ぶため映像資料などを活用した。給食管理実習 (2) 3 年次後期に実施した学外実習の振り返りとともに様々な実習施設の給食の特徴について学ぶことを目的とした。グループ

ワーク、発表、アンケート調査などを Teams, Forms を活用して実施した。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

すべての科目において、学生相互が自主的に学び合い、授業時間外に学修時間を設けていることが確認できた（エビデンス 1）。特に、給食管理実習（1）では、8割以上の学生が積極的に授業に参加、教材の利用が効果的、授業のポイントがはっきりしている、授業の内容、進む速さが適切と回答されていた。日頃より対面、Teamsなどで質問することが多かった（エビデンス2）。給食管理実習（1）、給食管理実習（2）のレポートおよび報告書などの作成では専用の教材を使用した（エビデンス 3）。給食経営管理論では参考資料およびワークシートを配布し、事前・事後学修を促し、基礎的知識の理解につながった（エビデンス 3）。給食管理実習（1）・（2）では現場における実践状況を理解するため映像教材を活用したところ、基礎的学習内容を実践的な視野でとらえることにつながった（エビデンス 4）。

調理学実験ではループリックによりレポートの評価を行ったが、回を重ねるごとに評価点の向上が見られ、得られたデータに基づいて客観的な評価をする力、まとめる力が身についた（エビデンス5）。グループワークにより実験を進める工夫も見られた。

5 今後の目標（これからどうするか）

給食管理実習（1）などで学生同士が授業に積極的に取り組み、議論し、資料収集、データ分析などを行う機会を増やす（ラーニング・コモンズ）。また、事前・事後学修を継続的に進められるよう、資料収集及び分析などの具体的提示を行う。将来の栄養士の職業をふまえた実践的な事例を通じた学びの機会を増やすよう進めていきたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 リアクションペーパーおよびレポート（非公開）
- 2 授業評価アンケート結果（大学HPに公開）
- 3 テキスト 岡本裕子他（編著）（2019）給食経営管理テキスト 学建書院
文部科学省（2011）調理場における衛生管理&調理技術マニュアル
学建書院
- 3 参考資料およびワークシートなどの配付（非公開）
- 4 映像資料 金田雅代（総監修）（2014）学校給食管理実践ガイド 丸善 等
- 5 レポート評価のループリック（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

永嶋久美子

(記入日：2026年2月26日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

調理学 (1年後期選択必修科目2単位) , 給食経営管理論 (2年後期選択科目2単位) , 栄養教育実習演習 (事前事後指導) (3年通年選択科目1単位) , 生活文化専門演習 (3年通年必修科目4単位) など

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

私の教育理念・目標は、科学的根拠に基づいた食、栄養、健康、調理を理解し、その問題解決に向けた行動をPDCA サイクルによって主体的に取り組む力を身に付けることである。また、これらの力を身に付けた実践力のある栄養士、栄養教諭の養成を目指している。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

学習を進めるにあたり、各科目では一般的な事例をあげ科学的根拠の学習、基準、技術の習得を進めている。調理学、給食経営管理論では、授業前に授業で学ぶ範囲のうち重要事項をまとめ、テキストを読みながら必要な用語を書き入れる事前学修資料をTeamsにて配布し、わかる範囲で書き入れて授業に臨むようにした。テキストおよびその資料を活用して授業時に解説し理解を深めた。さらに不明な点、授業後の学修の振り返りのためにも同資料を活用し提出をしてもらった。提出された課題はコメントを入れ、理解度の低い課題、質問については次の授業で解説するなどのフィードバックをした。この資料は期末テストに向けた学習にも活用された。教員は学修の理解度の確認ができ、非常に有効であった。さらに、3年次に栄養士実力認定試験を受験することを見据えて、栄養士実力認定試験の過去問題を活用して学修の定着や理解度の向上を行った。

栄養教育実習演習 (事前事後指導) では食に関する指導の基礎的な力を身につけるため、関連する教科の学習指導要領理解に加え、身近な事例および給食施設の事例を例に挙げ、ワークシートを活用しながら学習を進めた。実際の現場の状況を学ぶため映像資料などを活用した。食に関する指導は教科の理解とともに、栄養教諭の視点、知識、技術を総合的に活用して食に関する指導の全体計画、指導案の作成、教材の作成が求められる。そのため、児童生徒の課題を見出し、具体的で継続できる実践方法が提示できるよう、状況設定をしながら授業を進めた。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

すべての科目において、学生相互が自主的に学び合い、授業時間外に学修時間を設けていることが確認できた (エビデンス 1)。特に、調理学、給食経営管理論では、教材の利用が効果的、授業のポイントがはっきりしている、授業の内容、進む速さが

適切と回答されていた。日頃より対面、Teamsなどで質問もあった（エビデンス2）。給食経営管理論では参考資料およびワークシートを配布し、事前・事後学修を促し、基礎的知識の理解につながった。また栄養士の実務に即した演習を実施したことで栄養士の実務や次年度の実習の理解につながった（エビデンス 3）。栄養教育実習演習では現場における実践状況を理解するため映像教材を活用したところ、基礎的学習内容を実践的な視野でとらえることにつながった（エビデンス 4）。また、履修カルテを活用することにより、栄養教諭への理解、教職に関する基礎的な理解の向上につながった（栄養教諭履修カルテ）。

5 今後の目標（これからどうするか）

調理学、給食経営管理論では事前学修資料をもとに授業を進めていた。さらに栄養士実力認定試験、管理栄養士国家試験など将来を見据えて、過去問題を活用していたが、その活用には基礎的知識の理解と定着ができていなければ活用しにくかった。少なくとも栄養士実力認定試験ではA判定がでるような理解度にあげられるよう、事前学修資料の改定と関連科目との知識の連携ができる工夫をしていきたい。また、演習を含む学修資料があることで、学生同士が授業に積極的に取り組み、議論し、演習を進める様子が見られた（ラーニング・コモンズ）。演習のみではなく、今後は授業内においても学生同士が関わりながら学修が進められるよう、資料収集及び分析などの具体的提示を行う。将来の栄養士の職業をふまえた実践的な事例を通じた学びの機会を増やすよう進めていきたい。

栄養教育実習では、履修者が少人数のため模擬授業などで実践力を高めることに苦慮している。模擬授業の様子を録画するなど映像から客観的に振り返りをするだけでなく、児童生徒のかかわり方の力を養うためにも模擬授業時には学生に協力してもらおうなど対策を講じたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 リアクションペーパーおよびレポート（非公開）
- 2 授業評価アンケート結果（大学HPに公開）
- 3 参考資料およびワークシートなどの配付（非公開）
- 4 映像資料 金田雅代（総監修）（2014）学校給食管理実践ガイド 丸善 等
- 5 栄養教諭履修カルテ（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

生活文化学科 氏名 香山綾子

(記入日:2026年 2月 14日)

1 教育の責任

生活文化学科は“社会と生活”“生活と家庭”“栄養と健康”の3領域のカリキュラムが設けられており、衣・食・住の幅広い教養と多彩な資格を学生に取得させることが教員に課せられた使命となっている。私は、“栄養と健康”分野の教員として、以下に示す生命科学系科目の講義や実験を担当している。

担当科目:基礎ゼミナール(1年前期必修科目 2単位)、生化学入門(1年前期選択科目)、コミュニケーション能力基礎演習(2年前期必修科目 2単位) 解剖生理学(1年前期選択科目)、解剖生理学(1~4年前期選択科目)、運動生理学(1年後期選択科目)、生化学(2年後期選択科目)、生活文化専門演習(3年生通年必修科目 4単位)、生化学・解剖生理学実験(2年前期選択科目)、食品衛生学実験(3年後期選択科目)、人体の科学(1~2年後期選択必修科目)

2 理念

私の教育理念は、**人生のあらゆる局面において、周囲の信頼に応えられる実践力・課題解決能力と、周囲を幸せにできる人間力・総合力をもつ人材を育成すること**である。生命科学系科目の教育を通して生命のしくみや生命活動の意味を理解させ、教養を有した社会に貢献する人材となる学生を育てることを目標にしている。

3 方法

学生に対する教育のポイントは、授業を積極的・主体的に受ける環境を整えることと、当該分野の基礎知識と研究の意義を理解してもらうことである。この目的を達成するため、以下の方法を実践している。(1)学生に提示する資料は教科書的な知識の羅列とはせず、関連分野の最新知見などを盛り込み当該分野の面白さや意義を伝えるべく配慮する。(2)学生の身近で最近起こっている出来事や世間で注目されている出来事をその日の授業内容と関連させて導入部分に用いることにより、積極的な学修意欲を高めるよう配慮する。(3)学生の理解度を把握しつつ積極的な姿勢で授業にのぞんでもらうため、授業の最後に確認問題や小レポート課題を課す。(4)講義形式の授業は、パワーポイントスライドと補足資料を使用し、知識の定着を図る。

具体的には、特に学生が苦手意識を抱くことが多い解剖生理学や生化学は、多くの図表やイラストを使用し丁寧に解説する。解剖生理学、運動生理学と生化学の3科目は履修内容(知識量)が多いため、再説明や質問を投げかけ、落第しないように配慮する。基礎ゼミナールは、レポー

ト作成の基礎から丁寧に解説・指導し、多くの学生が1つのテーマに関して簡単なレポートを完成させられるように努める。生活文化専門演習は、卒業論文のテーマ選択を目標に、文献の検索方法や読み方を訓練し、卒業研究を完成させるために必要な要素を学ばせると同時に、身の回りには多くの興味深い課題が存在していることに気がけるように誘導する。実験系科目は、実験レポートや課題を課して、実験内容の理解、及び、探索力や文章力の向上を目指す。

4 成果

ほとんどの学生は真摯に講義や実験に取り組んでいたが、生化学では単位を落とす学生が生じてしまった。昨年度までと同様に各講義回の穴埋めプリント配布に取り組まないことが原因であり、向学心が欠如している学生への対応が必要であることが露呈した。講義途中から、追加の解説資料の配布や練習問題を授業終わりに加えたものの焼け石に水であった。これまでの学習習慣の欠如と基礎知識の欠落が最大の原因と思われ、今後このような学生への対応策を考える必要がある。

オンデマンド授業の人体の科学は、配信したビデオ聴取と課題問題への回答であったため、学生がきちんと学習に取り組んでいるのかを確認することは難しかった。履修者が100名弱であったために毎回記述式の問題を課すことは不可能だからである。

実験実習のレポートに関しては、実験内容の理解促進や客観的にわかりやくまとめる力を養うことを目的としていたが、提出することが目的となっている学生が今年度も見受けられたので、このような学生に対する対策が今後の課題である。また、基礎ゼミナールに関しては、参考資料の要点抽出に苦勞する場面が多く見られ、半期の指導のみでは読解力の向上は難しかった。1年後期以降に学ぶ他の教科において、読解力を養う指導を試みたい。

また、担当科目だけでなく担当科目以外の教科に関しても指導を仰ぎにくる学生が多く、学生との信頼関係を築けた結果だと考えている。

5 今後の目標

担当する生化学、解剖生理学は、学ばなければならない知識が膨大な科目であるために、知識定着の改善が今後の課題である。学生の人数が少なくなったので、小テストの頻度をさらに増やすことで対応することを考えている。また、実験レポートに関しては、模範レポートを配布する・優秀レポートを表彰するなどの工夫を施すことで、実験レポートの質の向上を目指したい。

6 エビデンスとなるもの(資料の種類などの名称)

- ① 授業で提出された課題、レポート(非公開)
- ② 2025年度前期授業評価アンケート、2025年度後期授業評価アンケート

③ テキスト

生化学若い研究者の会(2021)これだけ!生化学第 2 版 秀和システム

北口哲也 みんなの生命科学(2016)化学同人

志村二三夫(2021)栄養科学イラストレイテッド 解剖生理学 羊土社

浅見直美 川中健太郎 (2021)栄養科学イラストレイテッド 運動生理学 羊土社

菌田勝(2020)栄養科学イラストレイテッド 生化学 羊土社

桑田てるみ(編)(2013)学生のレポート・論文作成トレーニング 実教出版

ティーチング・ポートフォリオ

齋藤 美重子

(記入日：2025年9月5日)

1. 教育の責任

担当科目：社会生活入門(1)(1年前期必修科目2単位)、社会生活入門(2)(1年後期必修科目2単位)、消費生活論(2~4年前期選択必修科目2単位)、家庭科教育法I~IV(中学校・高等学校教職課程2~4年前期後期必修科目2単位)、生活文化専門演習(3年通年必修科目4単位)、卒業研究演習(4年通年必修科目4単位)、卒業研究(4年通年必修科目6単位)、家庭科教育法(小学校教職課程2~4年後期必修科目2単位)、家庭(小学校教職課程1~4年後期選択科目2単位)、総合講座(2)(1年後期共通教育科目選択必修2単位)、女性学(1~2年共通教育科目選択必修2単位)、ユニバーサル・ケア(1年前期共通教育選択科目2単位)、ジェンダー社会論特論(1)(大学院比(前)1年後期選択科目)、教職実践演習(中・高)(3~4年通年必修科目2単位)

2. 理念

私の教育理念・目標は、学生が生活者の視点を持ち、生活と世界・自然とを総合的に捉え、かつ生活課題を科学的に分析して、人と社会・環境との関係性を探究する力をつけることである。現代社会を多面的に探究し本質を熟考することをおして、人間関係形成能力、論理的思考力、課題発見・判断能力を培い、自分らしい最善の生活を営み、将来にわたり学び続ける態度を育成するとともに、社会に貢献できる人間を育成することである。

3. 方法

社会生活入門、消費生活論、家庭科教育法では、ICTを活用し各自の課題探究と、知識構成型ジグソー法、ブレインストーミングやKJ法を用いたグループ学習により多様な意見を吸収させ、発表、再び個人で考察する時間を設けるという往還の中で深い学びを促す。また、資料提供と課題探究学習による反転授業を行う。さらに、パワーポイントやDVDなど視聴覚教材により学習の理解促進を図る。

生活文化専門演習では、文献資料の担当部分についてレジュメを作成・発表させ、理解を深め現状分析を促す。認定NPO法人APLAとのオンライン会議により南北問題など社会構造的問題についてディスカッションし、フェアトレード商品普及策を考案した。認定NPO法人自立生活サポートセンター・もやいとNPO法人ごはんプラスによる路上生活者への食材配りの参与観察を行い、貧困の現状についてディスカッションを行い、オーセンティックな学びを得た。

ユニバーサル・ケアやジェンダー社会論特論(1)では、学生同士の対話や主体性を促進させるために、ICTを活用したプレゼンテーションを行う。家庭科教育法では、学習指導要領を詳細に検討し、学習指導案の作成と学生相互の評価を行う。知識と実習を融合させて知識の定着を図ったり、ICTを活用した授業を行うなど、よりよい教育方法について授業案を作成することをおして探究させる。模擬授業の実践、学生相互評価により振り返って、再度修正した模擬授業案を作成させることで学びを深める。

4. 成果

すべての科目において、学生が真摯に課題に取り組み、授業時間外に学修時間を設けていることがわかった(エビデンス①、②)。生活文化専門演習では文献資料の理解を深め、さらに現状把握と今後の課題について探究できた(エビデンス①、③-1)、③-2)。生活文化専門演習、卒業研究演習では、学外実習で貧困対策に力を入れている NPO 法人もやいの主催で新宿都庁前にてボランティアを行った。600 人以上に食材配布を行い、日本の現状を理解するとともに社会貢献ができた(①)。卒業研究の集大成として論文を作成し(エビデンス③-8)、卒業論文発表会ではパワーポイントを駆使したプレゼンテーションを行った(③-7)。家庭科教育法、ユニバーサル・ケアでは、学生同士が主体的に学び合ったことが確認できた(エビデンス①)、③-5)。社会生活入門(1)(2)では、外部講師によるオーセンティックな学びを得た(エビデンス③-4)。

さらに、授業時間以外に家庭科教職課程を学ぶ異学年交流を通して意欲を高めることができた(エビデンス③-5)。また、家庭科教員として卒業生たちの活躍は学生たちの良い刺激となり、学生時代に培った成長が窺える(③-6)。

5. 今後の目標

オーセンティックな学びをもたらす専門家や実践家を招聘することも異世代交流も行っていくことで人間関係形成能力を高めたい。また、フィールドワークは学生の学びをより深めるため、今後も行っていきたい。

ラーニングコモンズを活用し、学生同士が授業時間外にも対話をして、資料収集やレポートを検討する機会を増やす。また、リアクションペーパーをさらに活用し、再考を促して生涯をとおして学び続けるよう、主体的に学ぶ態度を育成したい。

6. エビデンスとなるもの

①リアクションペーパー(非公開)

②レポート(非公開)

③生活文化学科ホームページ(公開)

1) https://www.kgwu.ac.jp/seikatusouzou_seikat/55947

2) <https://www.kgwu.ac.jp/faculty/seikatsubunka/>

3) https://www.kgwu.ac.jp/seikatusouzou_seikat/56311

4) https://www.kgwu.ac.jp/seikatusouzou_seikat/67217

5) https://www.kgwu.ac.jp/seikatusouzou_seikat/66450

6) https://www.kgwu.ac.jp/seikatusouzou_seikat/66173

7) https://www.kgwu.ac.jp/seikatusouzou_seikat/65390

8) https://www.kgwu.ac.jp/seikatusouzou_seikat/64820

④テキスト:

齋藤美重子編著(2024)『アドボカシーが生きるユニバーサル・ケア』大学教育出版

佐藤真弓・齋藤美重子編著(2020)『自然と社会と心の人間学』一藝社

文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 家庭編—平成29年7月』
東洋館出版社

文部科学省（2018）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 技術・家庭編—平成29年7月』開隆堂出版

文部科学省（2019）『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 家庭編 平成30年7月』
教育図書

開隆堂（2022）『家庭総合—明日の生活を築く』『技術・家庭 家庭分野』『わたしたちの家庭科』

⑤参考資料及びワークシートなどの配布（非公開）

⑥映像資料：

特定非営利活動法人アジア太平洋資料センター（PARC）「どこに行ってる、私のお金？」

特定非営利活動法人アジア太平洋資料センター（PARC）「スマホの真実」

特定非営利活動法人アジア太平洋資料センター（PARC）「プラスチックごみ」

特定非営利活動法人アジア太平洋資料センター（PARC）「プラットフォームビジネス—自由な働き方の罠—」

コレクティブハウスかんかん森 居住者組合「森の風」「つながって、暮らそう！～10年目の、コレクティブハウスかんかん森～」

Andrew Morgan 監督「THE TRUE COST」,

「awareness test」

「The future of work」

東京学芸大学次世代教育研究推進機構「21CoDOMoS」

www.u-gakugei.ac.jp/~jisedai/news/21codomos.html

ティーチング・ポートフォリオ

佐久間美穂

(記入日：2025年 9月 25日)

1. 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

幼児教育学科：社会的養護Ⅰ（2年前期選択必修科目2単位）、子ども家庭支援論（3年前期選択必修科目2単位）、社会的養護Ⅱ（4年前期選択必修科目2単位・3年後期選択必修科目2単位）保育実習演習Ⅱ事前・事後指導（3年通年選択必修科目2単位）、保育実習Ⅱ（3年生通年選択必修2単位）

生活文化学科：社会福祉概論（2年前期必修科目2単位）、社会福祉概論（医療秘書実務士科目2単位）、高齢社会論（2年後期選択必修科目2単位）、医療秘書実務実習演習（事前・事後）

2. 理念 (なぜやっているか：教育目標)

保育士、栄養士、医療秘書実務士の資格取得、ならびに中学校家庭科・高等学校家庭科教員に必要とされる社会福祉関連の専門的知識・技術を習得し、あわせて主体的に適応できる能力を育成することを教育目標とする。

3. 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

社会福祉に関する制度・政策・実践について基礎的知識を学ぶとともに、学生同士によるグループワークを実施し、その成果をクラス全体で共有した。さらに各自によるリフレクションを通して振り返りを深め、双方向的な学修を行った。提出されたワークシートは内容確認や誤記の修正を行い、学生の意見・感想に対してコメントを付したうえで授業期間内に返却した。

工夫した点として、学生が自ら考え記述する力を伸ばすために十分な時間を確保し、授業終了前の個別リフレクションや次回授業でのフィードバックを組み合わせ、学修意欲の維持や成果の実感につながるよう配慮した。また、地域の福祉関係機関担当者を招聘した授業、福祉施設の視察、ボランティア活動の推進に加え、現場で活躍する卒業生を講師に招くことで、学修内容と実践を往還するカリキュラムを構築した。

4. 成果 (どうだったか：結果と評価)

返却されたワークシートを通じて、学生は授業内容を再確認し、自らの学修成果を把握することができた（エビデンス①②）。特に卒業生による講義は関心度が高く、今後の職業選択や学修の参考になったとの意見が多数寄せられた。さらに実習関連授業では、自身の実習内容や課題を振り返り、全体指導や個別指導を通して努力すべき内容を具体的に確認することができた（エビデンス③）。

5. 今後の目標（これからどうするか）

福祉・保育分野では法制度の改正が多いため、最新の情報や統計データを常に確認し、授業内容に反映していく。同時に、授業内ワークの内容についても随時見直し、改善を図る。また、学生が日常的に使用している iPad やパソコンを教育資源として活用し、資料提供や映像の効果的な利用方法を検討する。さらに、現場体験や外部講師、卒業生による講義を一層充実させることで、大学での学修が現場でどのように活かされるかを実感できるようにし、学生の職業選択にも資する取り組みとする。これらを通して、大学教育に求められる出口段階での学修成果の質保証につなげていきたい。

6. エビデンスとなるもの（資料の種類等）

- ① 授業内リアクションペーパー（非公開）
- ② 授業終了時に作成した学修の振り返りペーパー（600字程度・非公開）
- ③ 幼児教育学科の学修ポートフォリオ

ティーチング・ポートフォリオ

佐藤 真弓

(記入日： 2025年 9月 25日)

1 教育の責任

家庭経営学（専門教育科目必修2単位）、家族関係学（専門教育科目必修2単位）、家庭経済学（専門教育科目選択必修2単位）、女性と現代社会（専門教育科目必修2単位）、ライフマーケティング演習（専門教育科目選択必修2単位）、食生活文化論（専門教育科目選択必修2単位）、ジェンダー研究入門（共通教育科目選択2単位）、など。（2024年後期～2025年前期授業）

2 教育の理念

私の教育理念・目標は、現代社会における様々な諸相についてその本質的要因を探り考察し、それらを自分自身の生活課題としてとらえようとする主体性を養うこと、よりよい生活、人生を送るために、それら生活課題に対してどのような解決法があるかを考え、幅広い視点から深く思考しながら、自分らしいライフデザインを構想し実践できる態度を身につけることを目的としている。

3 教育の方法（実践の工夫）

家庭経営学、家族関係学、家庭経済学、食生活文化論、ジェンダー研究入門では、毎授業においてワークシートや資料を配布、また PDF データを teams より配信し、学習ポイントの習熟を図るとともに、事後学修に役立てられるようにした。授業では、パワーポイントのスライド、写真や動画を使用しながら講義し、毎授業後に小課題レポート、もしくは「forms」機能による小テストを実施し知識の定着を図っている。「forms」機能を利用して、回答を提出後すぐに学生が自分の点数、回答に対する教員からのコメントがみえ、復習に役立てられるようにした。「課題」機能からのレポート提出には一人ひとりフィードバックのコメントを付した。授業では前回授業の復習として小課題レポート、小テストの講評を行った。

また、家庭経済学では内容に関連した書籍について輪読・ディスカッションを行うことにより基礎理論の徹底および社会事象への関連づけを図った。

家庭経営学では iPad を用いて自身の居住地の地勢、特徴等を検索させ、それをもとにプレゼン、ディスカッションを行った。また、一つのテーマに基づいてグループごとのディスカッションを行うことにより基礎理論を押さえるとともに生活課題の発見や解決法について考えた。

さらに、家庭経営学では、我孫子市白樺文学館館長を招聘し、白樺派文豪志賀直哉の小説「襖」を題材に、畳敷きの部屋を仕切る襖を堺に繰り広げられる人間関係の在り様、日本人の境界意識、間合いの文化について講義をしていただき、ディスカッションを行った。

また家族関係学では社会人類学者の渋谷研先生を招聘し、沖縄の巫女とそれを取りまく沖縄の家族観、ジェンダー観について講義をしていただき、ディスカッションを行い、考えを深めることができた。

ライフマーケティング演習では、各々のレポートテーマを検討するために、学生同士で、ま

た教員と個別のディスカッションなどを行い、調査したいテーマを構想した。自身のテーマに基づきアンケート調査票を作成し、実際にアンケート調査を各々で実施し、集まったデータを Excel に入力、その後集計分析、考察する演習を行った。本演習を通じて、調査結果データの整理法、レポートや論文のまとめ方などの力を養うことができた。

また、女性と現代社会では、自ら興味関心のある社会の課題について図書館等の文献や官公庁の資料をもとにレポートを作成、それを発表しディスカッションを行うことにより、学生が自らの生活課題を探り出し主体的な解決法を探ることができるようにした。本授業において、テーマ（生活課題）を探し出す力が必要であり、学生本人が納得のいくテーマが見つかるまでグループ別、個別指導を入念に行った。

4 成果（結果と評価）

ワークシート、パワーポイントのスライド、YouTube 動画を使用して授業解説を行えたことにより、学生が授業内容により興味をもって集中して取り組むことができたのではないかと考える。ジェンダー研究入門の授業評価アンケートには「なんとなく知っていたことをしっかりと知識として身につけることができた。自分で考える機会が多く、授業を通して自身の価値観や考え方を広げることができた」というコメントがあった。

また、家庭経営学の演習形式の授業では、幅広い視野からの課題設定や主体的な課題解決態度や意欲の育成につなげることができたと考える。毎授業ごとの小課題レポートの提出や「forms」機能を用いた小テストの実施により知識の定着、生活課題の新たな発見などが確認できた。ライフマーケティング演習では、生活調査を自ら実施することにおいて、調査倫理、調査手法、分析方法の演習を行うことで卒論研究へ繋がる基礎力が身についたと考えられる。

女性と現代社会では、基礎ゼミ時のレポート作成方法を復習し、文献研究の結果をプレゼンさせることにより実践応用力、表現力などを養うことができた。発表後のグループディスカッションでは、課題の把握、問題意識の共有、問題解決について主体的に取り組むことができたと考える。またそれぞれの課題について当事者意識をもちながら自身の生活課題としてとらえることができるようになった。

5 今後の目標

幅広く知識を得て、様々な視点から総合的に思考する力をつけるために、グループワークやディスカッションなど演習形式をさらに積極的に取り入れていきたい。iPad など機器も積極的に活用していきたい。資料や文献を使用した事前事後学修をより具体的に促す。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・ワークシート、レポート（小課題、事前事後課題等）、forms、パワーポイントスライド
- ・期末レポート
- ・佐藤真弓『新版 生活と家族 - 幸せに生きることへの探究』一藝社（2025）

- ・佐藤真弓『生活と家族 - 家政学からの学び』一藝社 (2016)
- ・佐藤真弓・齋藤美重子編『自然と社会と心の人間学』一藝社 (2020)
- ・齋藤美重子編『アドボカシーが生きるユニバーサルケア』大学教育出版 (2024)
- ・(一社)日本家政学会家政教育部会編『家庭生活の支援』建帛社(2014)
- ・藤原辰史『緑食論』ミシマ社 (2020)
- ・藤原辰史『食べるとはどういうことか』農文協 (2019)
- ・村上陽一郎編『コロナ後の世界に生きる』岩波新書 (2020)
- ・斎藤幸平『人新世の「資本論」』集英社新書(2020)
- ・(一社)日本家政学会生活経営学部会編『持続可能な社会をつくる生活経営学』朝倉書店 (2020)
- ・重川純子『改訂新版生活経済学』放送大学教育振興会(2020)
- ・南直人『食の世界史』昭和堂 (2021)
- ・山極壽一『共感革命』河出新書 (2023)
- ・web サイト (授業資料として)
 - 消費者庁 HP <https://www.caa.go.jp/>
 - 厚生労働省 HP <https://www.mhlw.go.jp/index.html>
令和6年人口動態統計
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai24/index.html>
 - 農林水産省 HP <https://www.maff.go.jp/>
 - 経済産業省 HP <https://www.meti.go.jp/>
 - 外務省 HP <https://www.mofa.go.jp/mofaj/>
 - 法務省 選択的夫婦別姓 <https://www.moj.go.jp/MINJI/minji36.html>
- ・YouTube 動画 (課題資料として)
 - ベアテ FC2 Video <https://www.youtube.com/watch?v=KhA7FNwSdB0&t=192s>
 - NHK スペシャル「人類誕生」1～8
https://www.youtube.com/playlist?list=PLcynJ47QaWNvciCH-NvZL9DQW_J1Mlazi

ティーチング・ポートフォリオ

生活文化学科 叶内 茜

(記入日：2025年9月24日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

前期：ベジフル概論、子どもの食と栄養、家庭科教育法Ⅰ、コミュニケーション能力基礎演習、生活文化専門演習、保育学（実習および家庭看護を含む。）、フードマネジメント論、食と生命（オンデマンド）

後期：女性学（オンデマンド）、ワーク・ライフ論（オンデマンド）、総合講座(2)、女性学基礎論（1）、家庭科教育法Ⅱ、ライフ商品開発、生活文化専門演習

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

私の教育理念・目標は、社会学士として幅広い視野を持った家庭科教諭、栄養士を養成することである。特に、私が専門とする家庭科保育分野では、多様化する社会において「社会全体で子育てを担う」という子育ての社会化意識を学校教育の中で育てることが求められている。生活文化学科の特色の一つである、「社会学の視点」をもった家庭科教諭の養成を行うことは、上記の力を備え、これからの社会を生き抜く力を持った人材の育成につながると考えている。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

(1) オンライン授業

今年度より、共通教育科目の一部において、オンデマンド型授業が開始された。オンデマンド授業では、以下の運用を行った。学生による授業評価アンケートの結果もおおむね良好であった。課題の提出締め切り時間については、「現状の金曜日正午から、金曜日が終わるまでに変更してほしい」という要望があった。本件をふまえ、後期の開講科目については、課題の締め切り日を金曜日の 23:59 とした。

① 授業資料の配信

授業動画を連動する授業資料（パワーポイントデータ）を毎回配信した。必要に応じて、補足資料を提示した。

② 事後学習課題

Teams の課題機能を利用し、毎回の授業後に期日を定めて事後学習課題を設定した。学生の提出課題に対して、点数やコメントを入れたものを web 上で返却する

とともに、Teams の投稿欄において、次回の授業動画と併せて前回の学習内容のフィードバックを行った。

以前自身の課題として挙げた自由記述の分量のばらつきについては、最低字数を指定した。

③ 質問等への対応

個別の質問については、Teams のチャット機能を用いて対応した。試験に関する質問など、受講者全体に共通する内容については、Teams の投稿欄に投稿し、公平さを保つことを心がけた。

(2) 実践的・体験的な学習の充実、他教科との連携

対面授業では、学校へ来て授業を受けることの意義を感じられることを意識し、実践的・体験的な内容を取り入れた授業実践を行った。

① 子どもの食と栄養

保育士資格取得のための必修科目「子どもの食と栄養」では、実習を多く取り入れることで、保育者としての配慮事項を実践的に学ぶことができた。また、ゲストティーチャーとして附属保育園の管理栄養士の先生にご講義いただき、現場の生の声が聞ける機会は好評であった。学生たちは、はじめて給食室の様子を知り、保育者としての責任感と食育を担う者としての使命感を感じたようであった。

また、本年度は他教員が担当する他教科とも連携した授業実践を行い、「環境(担当：幼児教育学科 山下佳香准教授)」の授業で栽培・収穫したじゃがいもを利用して、「子どもの食と栄養(担当：生活文化学科 叶内茜)」の授業内で、いももちのクッキング保育の計画と実施をした。

② 保育学

家庭科教諭免許状取得のための必修科目「保育学」では、子どもの実態に触れられる機会として、附属保育園での交流活動を行った。今年度は初めての試みとして、年齢の異なるクラスにおいて 2 回の実習を経験した。例年よりも、幼児の年齢による発達の違いをより深く理解することができた。

上記以外の授業の中でも、なるべくグループワークや学生が発言する時間を設け、自分の考えを自分の言葉で表現できる機会を設けることを意識した。

4 成果(どうだったか：結果と評価)

(1) オンライン授業

授業評価アンケートの結果より、オンデマンド配信では、授業動画と併せてスライドの PDF データを配信した点が好評であった。

一方で、授業期間中は「期日内に課題を提出することを忘れてしまった」という連絡も複数みられた。対面授業とは異なり、1 週間程度の課題取り組みの猶予期間を設けているため、大学のルールに則り、期日内に課題提出が出来なかった際は特別な理由がある場合を除いて欠席扱いとした。

完全オンラインのため、対面授業の場合と比べると、夜間や休日のチャットでの学生からの問合せが増えた。内容は、「該当回のチャンネルが見つけれない」「課題が出てこない」など、システム上の問題に関するものが多かった。「最後まで記入する前に誤って課題を送信してしまった」というものもあった。授業時間外（平日の 1～5 限の時間外）での対応をどこまで行うかは、今後の課題である。

(2) 実践的・体験的な学習の充実、他教科との連携

実践的・体験的な学習を行った回は、学生が授業後に記入するふり返りの内容がより自分ごととして捉えられたものになっていた。また、実践後のふり返りの授業では、個人の体験を言語化・共有化する時間を多めに設けたことで、さらに学生の理解が深まったことがワークシートからも読み取れた。

他教科との連携については、授業でおさえたい内容を教員間で共通認識しながら進めたことで、教科間のつながりを持って授業を進めることができた。

5 今後の目標（これからどうするか）

授業評価アンケートでは、学生が主体的に活動する科目において、より満足度が高い傾向にあった。また、一部科目では、他教科と連携して授業実践を行ったことで、学生たちも保育領域間のつながりがより明確に捉えられたようであった。当該科目は残念ながら今年度をもって閉講となってしまいが、担当する別の科目でも学科のカリキュラム全体としてのつながりをより大切にしていきたいと考える。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・川村学園女子大学生活文化学科ホームページ（一般公開）
- ・Teams の担当授業チーム（学内のみ）
- ・学生のワークシート（学内のみ）
- ・学生が記述したふり返りシート（学内のみ）

- 学生による Forms の記述 (学内のみ)
- 授業評価アンケート結果 (学内のみ)

ティーチング・ポートフォリオ

生活文化学科 庄司 武史

(記入日：2025年8月15日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

2025年度の担当科目は以下のとおり。

- 通年 生活文化専門演習（専門教育科目必修，我孫子）
卒業研究演習・卒業研究（専門教育科目必修，我孫子）
- 前期 社会学概論（専門教育科目必修，我孫子）
情報リテラシー（共通教育科目必修，我孫子）
ワークルール論（専門教育科目選択必修，我孫子）
サービス産業論（専門教育科目選択必修，我孫子）
- 後期 情報処理基礎（共通教育科目必修，我孫子）
社会学特論（専門教育科目選択必修，我孫子）
データサイエンス入門（共通教育科目選択，目白）
社会学（共通教育科目選択，遠隔授業）
ジェンダー研究入門（共通教育科目選択，遠隔授業）
総合講座(2)（共通教育科目選択，第12回のみ）

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

作成者の専門である社会学および思想の知見，また，企業での就労経験をベースとして，現代社会の様ざまな出来事を自身の問題として冷静に受けとめ，将来を展望しつつよりよい社会を次の世代に手渡していくことに積極的な人間の育成を教育の目標としている。併せて，加速的に深化する情報社会において情報および情報ツールを安全・有益に活用できる情報リテラシーを身につけた人間の育成も目標である。

教育内容を学科が設定する「社会と生活」領域にとどめることなく，家庭や生活の領域をも視野に入れることで学科のカリキュラム・ポリシーの達成，大学・学部のディプロマ・ポリシーの達成に資することを期している。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

2025年度前期科目において実践した工夫は以下①～⑦である。このうち、③～⑦については前年度からの継続であるため（詳細は2024年度のティーチング・ポートフォリオ参照）、ここでは新たな工夫である①～②について説明する。

①音読の取り入れ

2024年度後期のティーチング・ポートフォリオでも指摘したことだが、最近、学生の読み書き能力の低さが目立つ。漢字が読めない、ゆえに用語を調べることができない、調べても意味が分からないので「何となく分かった気で終わっている」学生が多い印象が非常に強い。また、レジюмеやレポート、卒業論文においても基本的な日本語文章のルールが守られていない（段落のはじめを1文字分下げることがほぼ全ての学生ができていない）など読み書き能力をめぐる課題は多岐にわたる。

2025年度はこの点の改善を試みることとし、前期は学科の必修科目「社会学概論」において、ややアカデミックな水準の文献をテキストに指定し（富永健一、『社会学講義』、中公新書、1999年初版）、毎回、概ねひとつの章の精読を行うこととした。

その際に取り入れたのが「音読」である。段落ごとにランダムに学生を指名して音読してもらうことで、漢字や英単語の正しい読み方や意味を学ぶとともに、アカデミックな文章表現に慣れることを目指した。敢えて音読を取り入れたのは、音読では読めない語句を読み飛ばせないからである。滑らかに音読するためには、最低限、語句の読みはしっかり事前学修しなければならない。その意識、姿勢、習慣を身につけてもらうことを狙ったことである。

前期の前半、事前学修が習慣化してきた頃からは、授業中、熟語や英単語、慣用句等の意味や言い換えを質問するようにし（たとえば「人口に膾炙する」の意味や言い換え）、読み方だけでなく意味や類語・言い換えも意識した、より高い水準の事前学修を促した。

音読の順番が予想できるとそこしか準備しなくなるため、ほとんどの回でランダムにあてることにもこだわった。つまり、履修者全員がどこをあてられてもしっかり音読でき、語句の意味や言い換えにも答えることができる水準の事前学習をした上で授業に臨むことを厳しく求めた。

②卒業論文を視野に入れたレポート

毎回の授業が「読み」をめぐる改善の試みであるならば、期末課題のレポートは「書き」をめぐる改善の試みである。

課題は、音読に使用したテキストの任意の1章(各章は概ね6,000~8,000字)を指定された書式・指示にのっとって書き写すこととしたが、評価の際に最も重視したのが「横書きの日本語文章の一般的なルールに従うこと(ルールが分からない場合は国語の教科書やインターネット等で各自、調べること)」という指示に従っているかどうかである。たとえば、テキストは縦書きなので数字は漢数字で表記されているが、横書きで書き写すのであれば、通常、アラビア数字に直さなければならず、しかしこのルールを守っていた学生は提出者11名中3名だけであった。また、テキストの書き写しでも段落のはじめの1字下げができていない学生が多かった。

このほか、文字数と行数は32字×25行、ひらがな・カタカタ・漢字のフォントはMS明朝、英数字はcentury、文字の大きさは10.5ポイントといった細かい書式を守ることを厳しく求めたのは、これが卒業論文と同じ書式であり、将来、書くことになる卒業論文の見た目やイメージを知ってもらうため、また、卒業論文はこの書式を守らないと受領されないことを知ってもらうためである。

③穴埋め資料の活用

(前年度から継続)

④Teamsの活用

(前年度から継続)

⑤持参・貸与機器の活用

(前年度から継続)

⑥実践的な知識・スキル等の教授

(前年度から継続)

⑦提出物に丁寧にリアクションをする

(前年度から継続)

4 成果（どうだったか：結果と評価）

ここでも3の①～②について述べる。

①について。結論からいうと学生の成長が顕著にうかがえた。当初、つかえながら、たどたどしかった音読が中盤以降、事前学修のコツをつかみ、習慣化してからは多くの学生がスムーズに音読できるようになった。前半は授業2回で1章ペースであったのが、音読のスピードが増した後半は遅れた分を取り戻すまでになった。目に見える成長は学生の励みにもなったようで、当初、学生と共有した第15回までにテキスト1冊を読了するという目標を達成するため、一部の学生には協力して事前学修の水準を高めようとする動きも見受けられ、結果として目標を達成することができた（一部、難解な計量社会学の章は除外したものの）。

語句の意味や言い換えなどの質問に対しても、後半以降、自発的に回答する学生が増えたり、2024年度に単位を落とした再履修生が（2024年度とは全く異なる授業内容・形式だったにもかかわらず）ほぼ完璧に事前学修し、授業にも積極的に参加するなど（欠席も授業中の居眠り、スマホいじりもゼロ）、成長実感は教員・学生ともかなり強いものがあったといえ、担当教員としては非常に頼もしく感じられた。

一方で、授業評価アンケートの結果はかなり低く（得点4.190点、順位206位/239科目）、成長実感と授業への満足度は必ずしも連動しない様子もうかがえた。学生からは事前学修が負担という声もあり、実際、事前学修を諦めて授業の臨むことが常態化した学生もいたことを考えると、学生に期待する事前学修の水準を下げることも検討すべきかもしれない。

②について。レポートの指示は口頭および Teams のメッセージで相当程度、詳しく説明して質疑にも応答したものの、提出物の水準は「よくできていた数名」と「書式・指示をほとんど守っていない大半」とに二極化した。

後者の Teams の提出記録をみると締切間際の提出がほとんどで、課題が「書き写し」という一見、「楽勝」にみえるものだっただけに、締切間際に取り組みはじめ、そこでようやく書式・指示の設定が大変であることに気づき、結局、時間がなく、なんとか書き写すのが精いっぱい、という足跡がはっきりとうかがえる。一方、前者の学生のなかには、まず教員の指示を作業してみたところ、

書式設定がうまくいかず質問に来て解決し、指示どおりのレポートを提出したという例もある。「楽勝」にみせたことも、また、やや面倒な書式設定を指示したことも教員の計算であり、意地悪くいえば、良くも悪しくも教員の意図に見事に沿ってくれたわけであるが、後者の学生が予想より多かったことは課題であった。

細かくアドバイスしたレポートの返却や全体講評は今後も継続するが、提出間際の「雑な」取り組みと提出につながらないように、提出日 1 週間前を目途に取り組みを促すといった工夫を考えたい。

また、今回は分からないルールは自分で調べるということを示したが、これも負担となった可能性があり、サンプルを示すといった改善策も考えたい。

5 今後の目標（これからどうするか）

2025 年度前期は概ねシラバスに沿って順調に授業が進行できている自己評価であるが、先述した社会学概論のように教員と学生との受けとめに齟齬を来している例もあり、来年度に改善の検討を要する課題もある。評価できる取り組みについては継続していく所存である。

作成者が担当する科目は、学科の他の科目と比較すればいわゆる「座学」になることが多い。他の仕事や家事・育児等に左右されることなく、90 分着席してじっくり学習する機会は、大学を卒業すればほとんど期待できないのが社会生活の実情である。大学での「座学」の意義・効用はそこにあるものと作成者は考えており、また、生活文化学科において充実している実習や実験とは様相を異にする、その意味では学科のイメージや必修科目での学びとは大きく異なる社会学関係の学びにも様相を異にするからこそその意義があるものと考えている。今後は、こうした幅広い視野やテーマをじっくりと学ぶ意義等についてしっかり説明し、学生ともできるだけ意識・認識を共有していきたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・2025 年度前期授業評価アンケート
- ・2025 年度担当科目のシラバス

その他、記録に残っていない学生からの発言・意見、授業中の学生の様子等も踏まえていることを付言する。

以上

ティーチング・ポートフォリオ

生活文化学科 庄司 武史

(記入日：2026年2月22日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

2025年度の担当科目は以下のとおり。

- 通年 生活文化専門演習（専門教育科目必修，我孫子）
卒業研究演習・卒業研究（専門教育科目必修，我孫子）
- 前期 社会学概論（専門教育科目必修，我孫子）
情報リテラシー（共通教育科目必修，我孫子）
ワークルール論（専門教育科目選択必修，我孫子）
サービス産業論（専門教育科目選択必修，我孫子）
- 後期 情報処理基礎／情報処理(1)（共通教育科目必修，我孫子）
社会学特論（専門教育科目選択必修，我孫子）
データサイエンス入門（共通教育科目選択，目白）
社会学（共通教育科目選択，オンデマンド）
ジェンダー研究入門（共通教育科目選択，オンデマンド）
総合講座(2)（共通教育科目選択，第12回のみ）

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

作成者の専門である社会学および思想の知見，また，企業での就労経験をベースとして，現代社会の様ざまな出来事を自身の問題として冷静に受けとめ，将来を展望しつつよりよい社会を次の世代に手渡していくことに積極的な人間の育成を教育の目標としている。併せて，加速的に深化する情報社会において情報および情報ツールを安全・有益に活用できる情報リテラシーを身につけた人間の育成も目標である。

教育内容を学科が設定する「社会と生活」領域にとどめることなく，家庭や生活の領域をも視野に入れることで学科のカリキュラム・ポリシーの達成，大学・学部のディプロマ・ポリシーの達成に資することを期している。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

2025年度後期科目において実践した工夫は以下①～⑧である。このうち④～⑧は前年度および本年度前期から継続のものもあるため(2024年度および2025年度前期のティーチング・ポートフォリオ参照)，ここでは報告者にとって本学で初めてとなる完全オンデマンド型講義 2 科目（「社会学」「ジェンダー研究入門」）における工夫①～③について説明する。

他大学でのオンデマンド型講義の経験から、動画を視聴せずにワークのみ提出して出席を稼ぐ学生が一定数おり（本学のシステムでは誰が動画を視聴したかまではチェックできない。チェックできるシステムを導入している大学もある）、いかに動画視聴を動機づけるか、言いかえるといかに授業内容を理解してからワークに取り組ませるかが報告者にとっての課題であった。①～③はその試みである。

①配点の明確化

毎回のワークの満点を6点に設定し、全15回分を積み上げた合計90点を評価の中心とし、10点を加点としてワークの提出以外に質問や感想を自発的に送ってきた学生に与えることとした。ワークに取り組んだ結果として0点だった場合は1点を与えることとした。ワークの未提出=欠席は0点である。こうした配点基準は初回授業で説明した。欠席1回につき6点という小さくない点数を失うことを明確にし、継続して出席するよう意識づけることを目指した。

②制限時間および解答回数の設定

ワークの解答時間を15分とし（Teamsではこれより短くは設定できない）、解答回数も1回のみとした。後述するように、ワークの難易度は高くしたため、動画を視聴せずに、または視聴しても内容を理解せずにワークに取り組むと動画や資料を見直す時間もなく終了し再回答もできないため、きちんと動画を視聴し、内容を理解してから取り組むよう意識づけることを目指した。

③問題の工夫

ワークの多くは当該回の内容の理解度を問う選択肢制の問題6問（1問1点）であるが、重要用語を問う場合や数回のワークは記述式の設問も設けた。選択

肢は5～6個と多くしたほか、それなりに長文とした。短い時間で長い文章の選択肢を読んで正答を選択するためには授業内容を理解していなければならないためである。記述式のワークも数回、実施した。

また、全体的に難易度を高めたため、学生の負担感は大きいものと推測されたので、敢えて難易度の低いワークを数回、設定して、学修を継続するモチベーションを維持できるようにした。このような回の存在は事前に伝えたものの、いつ、何回そのような回があるのかまでは伝えなかった（その回を狙って出席しないようにするため）。

以下④～⑧は主に対面型講義における工夫であるが、⑦～⑧はオンデマンド型講義でも意識した工夫である。

④音読の取り入れ

(2025年度前期からの継続)

⑤卒業論文を視野に入れたレポート

(2025年度前期からの継続)

⑥穴埋め資料の活用

(前年度からの継続)

⑦実践的な知識・スキル等の教授

(前年度からの継続)

⑧提出物に丁寧にリアクションをする

(前年度からの継続)

4 成果（どうだったか：結果と評価）

ここでも3の①～③について述べる。

①について。配点を明確にしたことにより、学生自身が自分の現状を自己採

点することができ、モチベーションの維持または危機感の醸成に役立ったようである。コンスタントに出席している学生にとっては蓄積されていく得点が高評価につながる実感になったらしく、最後まで授業に出席するモチベーションになったとの声があった。また、なんとなく欠席することが多い学生は、中盤以降、このままでは得点が積みあがらないことに危機感が芽生え、後半、真剣に取り組むようになったとの声もある。ここで諦めなかったのは、残りの授業回数とワークの得点を勘案することで、残りのワークで何点取れば合格点に達するかを学生自身が計算して見通しを持たせたためとのことである。配点の可視化が一定の効果をあげた様子うかがえた。

②について。解答状況を見ると、初回から数回は、学生の側にも「なんとかなるだろう」「動画をみながら解答すればよいだろう」といった「甘え」があったのか、得点が低くかったり15分以内に解答し切れない様子うかがえた。回を重ねるごとに深刻さを理解して取り組み姿勢を改めたためか、次第に高得点を取る学生も増えてきた。報告者としては、これはきちんと学習内容を理解してからワークに取り組むようになった結果と受けとめたい。

③について。これも②と同じく、当初、得点が低かった背景と思われる。動画を視聴せず、とりあえずワークを開始してみたところ、思った以上に選択肢が多い上に読解にも時間がかかり、自信をもって解答できなかつたり、解答し切れなかったと思われる解答結果も見受けられた。だがこれも、回を重ねるごとに取り組み姿勢を改めて高得点を取るようになっていった学生がみられ、後半はワークの平均点も高くなった。また、折々交えた「敢えて難易度の低いワーク」の回を設けたことは好評で、受講継続のモチベーションの維持に貢献できたと感じている。

5 今後の目標（これからどうするか）

2025年度後期は概ねシラバスに沿って順調に授業が進行でき、かつオンデマンド型講義では設定した課題への対応の試みに一定程度の手ごたえを感じることができたため、自己評価は高い。

同時に報告者のオンデマンド型講義は、内容はともかく、評価方法は学生の

側からすればかなり「意地の悪い」仕組みだったようである。4月の時点でも、「オンデマンド型講義=ラク」というイメージが先行していたが、後期を終わってみると、受講者から「報告者のオンデマンド型講義はちっともラクではなかった」という不満の声も聞かれた。だが、これはむしろ「オンデマンド型講義=ラク」というイメージの払拭に多少は貢献できた証左とみたいところである。

作成者が担当する科目は、学科の他の科目と比較すればいわゆる「座学」になることが多い。仕事や家事・育児等に左右されることなく、90分着席してじっくり学習する機会は、大学を卒業すればほとんど期待できないのが社会生活の実情である。大学での「座学」の意義・効用はそこにあるものと作成者は考えており、また、生活文化学科において充実している実習や実験とは様相を異にする、その意味では学科のイメージや必修科目での学びとは大きく異なる社会学関係の学びにも様相を異にするからこそその意義があるものと考えている。今後は、こうした幅広い視野やテーマをじっくりと学ぶ意義等についてしっかり説明し、学生ともできるだけ意識・認識を共有していきたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・2025年度後期授業評価アンケート
- ・2025年度担当科目のシラバス
- ・授業の感想（オンデマンド型講義）

その他、記録に残らない学生からの発言・意見、授業中の学生の様子等も踏まえていることを付言する。

以上

ティーチング・ポートフォリオ

生活文化学科 築館香澄

(記入日：2026年2月27日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

前期：食品学（1年必修科目2単位）、食品加工学（3年選択必修科目2単位）、基礎調理学実習(1)（1年選択必修科目1単位）、フードコーディネート論（3~4年選択科目2単位）、食品の官能評価と鑑別（3~4年選択科目2単位）、生活文化専門演習（3年必修科目4単位）

後期：食品衛生学（2年選択必修科目2単位）、食品学実験（1年選択必修科目1単位）、食品加工・開発実習（3年選択必修科目1単位）、基礎調理学実習(2)（1年選択必修科目1単位）、フードスペシャリスト論（3~4年選択科目2単位）、生活文化専門演習（3年必修科目4単位）

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

私の教育理念・目標は、学生が「食べる」というあまりにも身近で日常的に繰り返している行動について、生化学的視点で生命現象を理解し、自らの健やかな生活と生命を尊重する力を養うとともに、栄養士・家庭科教諭として専門的な知識を持って、どのようにして周りの人々の健康へ寄与できるのか主体的に考え行動する素量を身につけ、社会へ送り出すことである。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

食品学では、栄養学や調理学で学んだ知識と食品学の知識が結びつくように、時間的に可能な限り他の科目で学んだ内容も振り返り、自らが日頃生活している「食べる」という行為に食品学で得た知識を落とし込めるような説明を心がけた。また、食品学・食品衛生学では基礎となる暗記しなければならない内容が多くあるため、小テスト（エビデンス1）を実施し知識の定着を促した。食品加工学では、身近にある加工食品を例に挙げ、写真や図表を多く取り入れて説明をした。

専門分野の知識の修得については、授業の期末試験での評価だけではなく、卒業時に栄養士として知識が定着していることが重要である。その為、2024年度から栄養士実力認定試験の受験を3年生の12月に受験している。関連科目である食品学（1年）・食品衛生学（2年）・食品加工学（3年）では、各々の授業で過去問題に取り組んだ。

食品加工・開発実習では、Teamsを利用した学生同士のディスカッションの場の設定および教員と学生との双方向授業法を取り入れた（エビデンス2）。チームの中に各班のチャンネルを設け、チャンネル内の「投稿」機能を用いて班員同士が実習結果やレシピ考案の意見を共有できるようにした。考案したレシピは、試作・製造し、青森りんごオリジナルコンテストに応募した。応募に必要な応募用紙の提出や考案したレシピの材料発注についての書類もチャンネル内の「ファイル」機能の中で行った。また考案したレシピについて発表させプレゼンテーションの方法も学ぶよう促した。

食品学実験においては、実験データを原理などと照らし合わせて考察し、論理的に表現することができるよう、レポートの指導を繰り返し行い、事前事後の学習を促した。昨年度同様に受講者数が少なかったため、実験の片付けの時間を利用し学生一人ずつに口頭でレポートの修正点を伝えるといった細やかな指導をした。今年度は学力レベルの低さが顕著であったため、実験データから食品成分の含有量を計算する方法を細かく説明し、数値を代入すれば結果を導き出せるように説明をして、学生たちが結果をどのように考察すればよいのか考えることに重点を置いた。実験中は教員の目が行き届き、各個人の取り組みを細やかに観察して、実験のデータを学生と共に確認したり、小さな質問にも随時回答するといった指導をした。最終授業に授業の感想を記述するアンケート（エビデンス3）を行い、授業の目的が達成されたか確認した。

基礎調理学実習では、ノートの提出回数を昨年よりも増やし、学びの定着を確認するとともにグループワークの中での各々の役割や達成度を評価した。前期の最後には、一人ひとりについてフィードバックの時間を数分設け、後期の実習への目標と課題を明確にさせた。

フードスペシャリスト資格に関連する科目であるフードスペシャリスト論、フードコーディネーター論、食品の官能評価と鑑別では、指定教室での授業以外に調理実習室で食器やカトラリーを前にした講義や学外研修「レストランにおけるテーブルセッティング、テーブルマナー、サービスを学ぶ」を実施し、資格取得のための専門的知識を実際の体験からも習得できるよう促した。また、資格試験対策として授業内での過去問の解説および特別講座を設け、学生の資格試験合格を目指した。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

小テスト（エビデンス 1）を行った授業では、期末試験において一部の学生について知識の定着を確認することが出来た。学生の基礎学力の低下や授業への積極性の欠如も散見され、小テストの実施だけでは知識の定着に繋がらなかった学生が多くみられた。

3年生が受験した栄養士実力認定試験では、B判定となった学生が多く、A判定・C判定の学生も同数程度みられ、知識のばらつきが顕著となった。1年生、2年生については、次年度以降の試験対策特別講座で引き続きフォローしていきたい。

Teams を利用した学生同士のディスカッションの場の設定および教員と学生との双方向授業法を取り入れた食品加工・開発実習では、学生が実習で製造した加工食品の写真や実験データを「投稿」に掲載することで、互いに実習の様子や結果を確認していた（エビデンス 2）。またレシピ開発について授業内で話し合ったことをチャンネル内に書き留めたり、授業外で調べたことや意見を書き込みしたりと交流する様子が見られた。これは、学外実習のために毎週公欠学生がいる 3 年生の授業にとって大変有効な手段であった。また、各班の話し合いの様子を教員が確認し、教員からのアドバイスも授業時間外に書き入れ指導することもできた。班ごとに考案したレシピは「青森りんごオリジナルレシピコンテスト」に応募し、1 作品が「総菜部門賞」を受賞し、学生の達成感に繋がった。

食品学実験では授業後のアンケート（エビデンス 3）より「苦手だった実験が楽しくなった」といった感想が多く見られ、実験に対する苦手意識をなくすことができた。また、結果を導き出す計算はわかりやすく方法を提示したことで、考察をすることに目が向けられた事が、「苦手」から「楽しい」に繋がったと考えられる。その反面、実験データから結果を導き出す計算については全く理解が得られなかった事は今後の課題と言える。

基礎学実習では、ノートの提出回数を増やしたり、個人と話をする時間を設けたりしたことで、学生たちが目標を持って行動する姿が見られた。今年度の 1 年生はどの科目においても遅刻・欠席が目立っていたが、調理学実習では比較的出席率がよかった。

フードスペシャリスト資格試験には受験者 13 名中 11 名が合格し資格を取得した。資格取得のための関連科目では、授業評価アンケート（エビデンス 4）の得点も高く、可否の発表前に行われた授業評価アンケートであったが、満足度が高いことが示された。学外研修「レストランにおけるテーブルセッティング、テーブルマナー、サービスを学ぶ」の後に提出されたレポート（エビデンス 5）には、「ホテルのホスピタリティを強く感じる事ができた。」「普段の料理や調理実習では扱わない食材（エディブルフラワーや植物）に、特別感を感じた。」「一つ一つのマナーには意味があり、ただ食べるだけではなく「相手に不快感を与えず、お互いが気持ちよく食事をするための心遣い」であることを学ぶことができた。」「社会人として公共の場や会食に参加する際、自信をもって振舞えるようにするよい練習の機会ともなった。」といった感想があり、授業では経験できない内容を学外研修で修得した事が示された。

5 今後の目標（これからどうするか）

基礎科目では、反転授業や小テストだけでは学生の学修意欲に繋がらないことも散見されるようになった。従って、少人数であることを生かし、ゼミ形式で授業を進めたり、講義の中で学生を指名して回答させるといった教授法に立ち返ることも必要だと考える。教授法については、はじめから固定せずに、学生の学力の定着や学力レベルを観察し、学生の性質を見極めて柔軟に進めていく必要がある。実験実習の授業においても同様であると言える。

各授業で栄養士実力認定試験の該当科目の過去問題に取り組みせ、繰り返し学習させて知識の定着を促すとともに、受験前にプレ試験を行って得点の低い学生について補修するなどの工夫が必要であるとする。

フードスペシャリスト資格に関わる科目については、受験者全員を合格に導けるように試験対策をより強化したい。具体的には、教員が過去問の解説をするよりも学生が自ら解説して知識を習得できるような授業法を取り入れたいと考える。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1) 小テスト（非公開）
- 2) Teams を利用した学生同士のディスカッションの場の設定および教員と学生との双方向授業法（非公開）
- 3) 最終授業でのアンケート（非公開）
- 4) 授業評価アンケート（非公開）
- 5) 学外研修後のレポート（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

生活文化学科 朴善美

(記入日：2026年2月18日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

通年 卒業研究演習（4年必修科目、4単位）

卒業研究（4年必修科目、6単位）

生活文化専門演習（3年必修科目、4単位）

前期 臨床栄養学（2年選択必須科目、2単位）

栄養指導論（1）（2年選択必須科目、2単位）

ライフステージ栄養学（2年選択必修科目、2単位）

栄養指導基礎実習（3年選択必修科目、1単位）

後期 臨床栄養学実習（2年選択必須科目、1単位）

ウェルネス栄養指導実習（3年選択必修科目、1単位）

栄養指導論（2）（2年選択必須科目、2単位）

公衆栄養学（3年選択必修科目、2単位）

エバーサル・デザイン・フード（2年後期選択科目、2単位）

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

日韓両国の臨床現場で勤務する中で、栄養士は単に栄養管理を行う専門職ではなく、日々の食事と身体との関連を科学的に理解し、それを根拠に基づいて説明・実践できる専門家であるべきだと強く感じた。この経験を基盤に科学的根拠に基づいた栄養指導を実践し、人々の健康維持・増進に貢献できる栄養士の育成を教育目標としている。

食生活は生活習慣病の発症予防のみならず、疾病の重症化にも深く関与する。したがって、食事と健康の関連を科学的に理解し、根拠に基づいた適切な助言ができる能力は、栄養士に不可欠である。

本教育では、知識の修得にとどまらず、対象者の状況を明確に把握し、科学的根拠に基づいて判断し、分かりやすく伝える実践力の育成を重視している。そのため、臨床現場で経験した具体的な症例を授業に取り入れ、学生が専門職としての責任を実感し、能動的に学修に取り組めるように工夫している。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

臨床栄養学、栄養指導論（１）（２）、ライフステージ栄養学、公衆栄養学などの講義科目においては、授業内容を振り返り次回の学習につなげることを目的として、昨年度の引き続きリフレクションシートを活用している。従来は感想や学修内容の要約が中心であったが、本年度は記述方法を見直し、単なる羅列に終わらないよう工夫した。公衆栄養学および栄養指導論（１）では、重要概念に対する学生自身の意見や考えを記述させる形式とし、臨床栄養学およびライフステージ栄養学では、理解度を確認できる穴埋め式の設問を取り入れた。これにより、学生が「なぜこの内容を学ぶのか」を意識しながら思考できるよう設計している。また、栄養指導論（２）では、講義終盤に当該テーマに即した栄養指導用の媒体のレイアウト作成課題を課している。これは、受動的理解から能動的な知識構築へと学修段階を進展させることを目的としたアクティブラーニングの一環である。学生は、対象者の特性、栄養指導内容の優先順位、視覚的配慮などを統合的に検討しながら媒体を設計することで、実践的判断力および応用力を養うことができる。リフレクションシートは、学生の理解度や思考課程を把握する重要なコミュニケーションツールとしても活用しており、次回授業への改善にも役立てている。さらに、講義科目では管理栄養士国家試験および栄養士実力認定試験の出題傾向を踏まえ、頻出分野については過去問題の解説を行い、知識の整理と応用力の向上を図っている。

実習科目（臨床栄養学実習、栄養指導基礎実習、ウェルネス栄養指導実習）では、栄養士の業務が他職種連携の中で遂行される専門職であることを理解させることを重視している。そのため、グループ内で役割を均等に分担し、全員が主体的に参加できる環境づくりに配慮している。また、臨床現場での実務経験を基にした症例を提示し、問題解決型学習（PBL）を取り入れている。学生は、講義で学んだ知識を活用しながら症例の問題点を抽出し、解決策を検討することで思考力を養う。さらに、他者と意見を交換しながら課題に取り組むことで協調性を高め、実践的対応力の向上を図っている。

栄養士の業務は単独で完結するものではなく、チームの一員として判断・提案を行う専門職である。そのため、協働的学修の機会を意図的に設けることは、将来の実践力の基盤形成につながると考えている。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

リフレクションシートにおいては課題内容を具体的に提示したことで、授業の重要概念や到達目標をより明確に示すことができた。その結果、学生の記述内容は単なる要約から、自身の意見や考察を含む内容へと変化がみられ、授業内容に対する理解の深化がうかがえた。

授業評価アンケートでは、「授業内容に触発され、もっと勉強したいという気持ちになりましたか」および「総合的に判断して、この授業に満足できましたか」という設問において、後期の全科目で回答者のほぼ全員（1名を除く）が「そう思う」または「どちらかというと思う」と回答した。この結果から、学生が当該科目に関心を持ち、主体的に学修へ向かう姿勢が醸成されたこと、ならびに授業満足度が高まったことが示唆される。

一方で、現在のリフレクションシートは主に教員と学生の個別的なやり取りにとどまっており、特に講義科目においては学生同士が互いの考えを共有する機会は限定であるという課題も明らかになった。他者の意見や視点に触れることは、思考の深化や視野の拡大につながると考えられる。そこで、次年度はリフレクションシートを紙媒体から ICT を活用した形式へ移行し、内容の共有や意見交換が可能な仕組みを導入する予定である。これにより、個別的な振り返りに加え、協働的学修の要素を取り入れ、より多角的な思考を促進したいと考えている、

5 今後の目標（これからどうするか）

次年度は、Microsoft Forms を活用し、講義および実習科目における学修の可視化と協働的学修の促進を目標とする。

まず、管理栄養士国家試験および栄養士実力認定試験の過去問題を Microsoft Forms 上に掲載し、学生に解答させる。解答結果は自動集計機能を用いて正答率を可視化し、クラス全体で共有する。これにより、全体の理解度や頻出の誤答箇所を明確にし、学生が自身の到達度を客観的に把握できるようにする。また、誤答の傾向を分析し、授業内で重点的に解説することで、弱点補強と応用力の向上を図る。

さらに、リフレクションシートも Forms を用いて実施し、学生の記述内容をデジタル化する。記述の中から代表的な意見や多様な視点を匿名化したうえで共有し、学生同士が他者の考えに触れる機会を設ける。翌週の授業では、それらを基にフィードバックと復習を行い、個別的振り返りを協働的学修へと発展

させる。

これらの取り組みにより、学生が自らの理解度を客観的に認識し、他者との比較や意見共有を通して思考を深化させる環境を整備することを目指す。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1) リフレクションシート（非公開）
- 2) 授業評価アンケート（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

学科：生活文化学科

氏名 松本梓

(記入日：2026年2月10日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

【前期】

基礎栄養学(必修科目、2単位)、食生活論(選択必修科目、2単位)、給食管理実習(2)学外(選択科目、1単位)、応用調理学実習(1)(選択科目、1単位)、公衆衛生学(医療秘書実務士必修科目、2単位)

【後期】

公衆衛生学(選択必修科目、2単位)、フードサービス論(選択必修科目、2単位)、応用調理学実習(2)(選択必修科目、1単位)、給食管理実習(2)学外(選択科目、1単位)、

【通年】

生活文化専門演習(必修科目、4単位)、卒業研究演習(必修科目、4単位)、卒業研究(必修科目、6単位)

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

① 課題解決力を育成する

学生が自ら考え、自ら学ぶ力をつけることが出来るような声かけや、課題提示を行っている。栄養に関する専門知識の修得および定着を図るとともに、自ら進んで課題解決に取り組む姿勢を養うことを目標としている。

② 多様な考え方を促す

提出課題には、コメントを記入し次回授業時に返却を行っている。また、調理実習ノートは第7回目と第15回目の実習時に集めて、課題への取り組み状況に応じたコメントを添えて返却を行っている。学生一人ひとりの考え方に寄り添いながら、別の考え方や視点を提示し、柔軟な思考力を養うことを目的としている。

③ 協調性を養う

栄養士は多職種と連携して仕事を行う専門職である。そのため、調理実習では班ごとに実習を行っている。グループワークを通して班員同士が協力し合い、お互いの長所や短所に気付き、補い合うことの大切さを学ぶ機会を大切にしている。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

①専門用語及び知識の修得について

基礎栄養学や公衆衛生学は、専門用語が多く苦手意識を持つ学生が多い科目である。そのため、授業の冒頭において Forms で作成した復習クイズを実施し、知識の定着を図った。また、復習クイズにて取り上げた問題は、再度スライドを用いて専門用語の解説を行った。

1年生で履修する基礎栄養学は、化学構造式が教科書に記載されている場合が多い。高校で有機化学を履修していない学生が多いことを想定し、授業スライドは化学構造式をイラスト化し、学生が苦手意識を持たないように心がけた。また、復習プリントを作成し、授業で取り上げた内容の反復学習を行った。

②実習を通した専門知識の修得について

応用調理学実習(1)および(2)では、栄養士として必要である食材や食文化の理解および、調理技術修得を目的として実習構成を考えた。また、調理は化学変化によって美味しさが生まれる事から、学生が他の授業と調理実習の内容を関連付けられるように、実習内容を踏まえた課題を設定した。課題は、実習内において説明を行った。また、説明内容を基に授業時間外で調べ学習を行ってもらい、学習内容をノートにまとめる事で、自発的な課題解決力を養うように工夫を行った。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

多くの学生は一生懸命授業へ取り組み、単位を修得した。しかし、理解度の差が学生間で大きく、全ての学生に対して授業内容を十分理解してもらうことに苦勞した。取り組みとして、今年度は、確認クイズをこまめに行なった。昨年度よりクイズの頻度を多くしたことで、学生が苦手としている箇所を授業内で繰り返し説明を行う機会を多く設定した。その結果、学生の理解および知識の定着に繋げることができたと評価している。

応用調理学実習(1)は、調理技術及び知識の修得を目標としていたが、試験の結果から技術および知識が向上した学生は多くなかった。また、学生が主体的に学ぶことを目的に、学生が考案した料理をコンテストへ応募する機会を設けた。しかし、想定していた以上に料理のレポーターが限られていたこと、計算力が十分でないこと、調理の段取りに課題が見られることなどが明らかとなった。今後はこれらの課題解決に向けて、実習の構成や学生への声かけの在り方、ならびに計算に関する反復学習の方法について改めて見直していきたい。

5 今後の目標（これからどうするか）

基礎栄養学や公衆衛生学など、専門的な内容を扱う授業では、引き続き丁寧な説明を心がける。あわせて、授業スライドについては、学生にとって分かりやすい表現やイラストを用いることで、化学構造や法律など苦手意識を持ちやすい内容であっても、理解しやすくなるように工夫を行う。

調理実習は、調理技術の修得と定着を目標に、自宅でも調理を行う習慣が身につくような実習構成とする。さらに、計算の反復学習を実習に取り入れるとともに、班で協力して段取りよく調理を進める重要性を伝え、主体的に実習へ取り組む姿勢の育成を目指す。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・授業内実施課題(非公開)
- ・授業評価アンケート
- ・田地 陽一 栄養科学イラストレイテッド 基礎栄養学 羊土社
- ・公衆衛生がみえる 2024-2025 メディックメディア
- ・武山英麿 他 公衆衛生学・健康管理概論 第一出版
- ・山崎清子 他 NEW 調理と理論 同文書院